

に仕へ、劉基・吳伯宗等と交り、永樂遷都の際に駕に隨ひ、その後、欽天監五官靈臺郎となつたといふ馬沙亦黑は如何にしても陳誠李暹等と共に來たものとは認め難い、思ふに釋義の著者は、馬沙亦黑が撒馬兒罕の人で、明に仕へて居たといふことから、漫然之を西使で有名な陳誠等と共に來朝したものとし、然もこれが洪武の朝に仕へた人であつたところから、更に陳誠の使した年なる永樂十二年を洪武十二年としたのでもあらうか、何れにしても杜撰の甚しいものである。

因みに記して置くが、陳誠の使西域記なる書も、其の初めて使を奉じて歸つて來た永樂十三年に書かれたもので、明史卜花兒傳に「永樂十三年陳誠自西域還、所經哈烈・撒馬兒罕・別失八里・俺都准・八荅黑商・迭里迷・沙鹿海牙・賽藍・渴石・養夷・火州・柳城・土魯番・鹽澤・哈密・達失干・卜花兒凡十七國、悉詳其山川・人物・風俗、爲使西域記以獻、以故中國得考焉」と記されて居る、今學海類編の中に陳誠の使西域記なる一篇が收められてあつて、内藤博士は之を劉鐵雲の藏本より抄寫して藏して居られる、博士は此の一篇を以て、明の實錄永樂十三年十月の項から抄出したもので、陳誠の原本ではないといふ識語を付して居られるが、勿論誤らない斷定である、自分は別に大明一統志の撒馬兒罕・哈烈・亦力把力等の條下に、陳誠使西域記として引いてある夾注のあるのを見て、取りて之と比較して見たが、一統志に引用した使西域記といふのは、實錄従つてまた學海類編に載せてあるものよりも遙に細密なもので、明史の記せるが如く山川人物風俗等を詳にしたものであつたことが分る。

馬沙亦黑が陳誠と共に來朝したことは誤として、洪武十二年頃に撒馬兒罕から來たのは事實であらうと認める